

s u n n y



その心の眼差しの清々しさ。胸の痛くなるような正直さ。
そして全ての困難と悲しみを笑い飛ばす
強さとしなやかさを。

Interview by HRS HAPPYMAN
09/28/05 & 11/05/05
無断転載は禁止します。

● New York, New York

H: SunnyさんがNYに来たきっかけは何？

SUNNY: 私はニューヨークに来る前に、パリに3年住んでいたの。1977年に東京からパリに行って、そこでエス・モードっていう2年制の学校に通ったのね。その頃、友達がニューヨークに留学に来ていて、私が彼を訪ねてパリからニューヨークへ遊びに来たの。それが初めてのニューヨーク。その時彼が私に教えてくれたのがドラッグで、**だから初めてのニューヨークへの旅行と言うと、ドラッグをやってハッテン場に行っただけってことしか覚えていなくて(笑)**だから、実はスゴくいい思い出ばかりなの(笑)

H: (笑)

SUNNY: パリで学校を出てから一年位、フリーランスで仕事をしていたの。でもその頃のフランスの大統領はミッテランで、ビザの取得がすごく難しかった。仕事の面で将来性もあまり感じ無くて。で、一方アメリカは姉がその時には既に結婚によってアメリカ人になっていたの、私のビザ取得のプロセスが早かった。そういった色々な理由があって、ニューヨークに来たの。ニューヨークに来てまず友達のところに住んでいたのだけど、丁度その上の階の部屋に空きが出て、そこを借りて住み始めた。それが6番街の58丁目。私はまだ親に仕送りをしてもらっている状態で、**でも段々仕送りだけでは、遊ぶのにもドラッグをするのにもお金が足りなくなってきた(笑)**

もちろんアパートの家賃の分とか食費には足りているのだけど、それ以外のこととなるとお金が足りないの。パリにいた頃はクラブもタダで入れたし、ドリンクも全部タダ、プライベート・パーティーも全て顔パスでは入れたから、お金

の問題は無かったのよ。**あまりに遊び過ぎていたからだけ(笑)**でもニューヨークに来てからは、クラブに行くにも、タクシーに乗るのにもお金が掛かる。それが逆に良かったんだけどね、もしパリの時と同じ状態のままだったら、洋服作ろうなんて思いもしなかっただろうし。

で、その58丁目の自分のアパート、そこでプライベートで洋服を作り始めた。この場所もたまたまビジネス的なロケーションとしては最高だったのね。客も仕事関係の人達も来やすいし、スタートから幸先が良かった。肩書きとしても58丁目ってところからみんなやっぱりグラマーな印象を持つしね。一人のお客さんから始めたけど、だんだんお客さんが増えて来た。**はっきり言って私、縫うのが下手で好きじゃなかったの。だからその頃私の縫ったのはひどかったの(笑)**でもとにかくその頃は、ドラッグを買うお金が欲しくて(笑)それが理由で頑張っていた(笑)それでもお客さん、戻って来た。本当にありがたいよね。

でもね、一番大変なのが月曜日と火曜日。週末にハイになっていた分、いつも気持ちが落ちてしまって。週末楽しかった分同じくらい落ち込むの。だからドラッグが切れるとよく、考え込んでいた。自分の将来についてこんな事ばかりやっていいのか、ニューヨークまで来てこれでは親にも悪いなあ、ってね。で、体だって何十時間も寝ないで踊らばなしだから疲れきっている。だからとても気が短くなって怒りっぽくなるの。ちょっとした事でイライラする、そんな自分がすごくイヤでね。自分のそういうところをなんとかしたい、っていつも思っていた。月曜、火曜日は殆ど仕事という仕事は無理だったから、仕事になるのは水曜日と木曜日。つまりクスリ中心の生き方だったことになるけど(笑)。でも仕事が本格的になり始めた途端、生地代とかいろいろなことの為に、お金を全部使っちゃうから、お金を遊ぶ為だとかドラッグに使うのは自分にはとても贅沢なことになっちゃって、出来なくなった(笑)。人に遊び

に誘われても仕事の期日あるし、だんだん遊ばなくなっていったの。

H: 80年代のニューヨークってどんな感じだったんですか？

SUNNY: そうだね、1980代のニューヨークって、例えば映画館に行くでしょ、すると座席の後ろの方で、皆映画を見ながらマリファナ吸っているの(笑)。それが全く普通のことだったのね。そういった意味での自由というのはあったけど、ニューヨークという街自体について言えば公共の場所、例えば公園や地下鉄の治安は最低だった。もうメチャクチャ。悲惨だったよ(笑)。

● 80年代ニューヨークの ゲイ・シーン&ドラッグ

H: Sunnyさんが経験した80年代の頃のニューヨークのゲイ・シーンってどんな感じだったんですか？

SUNNY: あの時代を経験した人は多分皆こう言うと思うんだけど、すごくいい経験したの。

H: 伝説のクラブSaintにも行っていたんですね。

SUNNY: 勿論。あれは経験しておいて本当に良かったと思う。あんな経験なんて一生に一度あるかないかじゃない？色んなアーティストが遊びに来ていてね。ドラッグが仮に無かったとしてもまずクラブの規模が桁違いだったし、メンバー制のクラブだったから、何か起きているのかが分からない緊張感があった。勿論自分の知り合いの中にはそういった大箱のクラブに行かない子達も居たの。イースト・ビレッジの小さいクラブで遊ぶのが好きな子達だとか。でも小さい箱のクラブとかバーだったら、パリにはもっと良いのがあったのよ(笑)ニューヨークに来てまで、パリよりも廃れた感じがするニューヨークの小さなクラブは行かなくてもいいな、って思ったの。そういうところよりはセントの

ような、パリや東京では見たこともないところに行った方がいいや、って思って。本当に最高の経験をしたよ。

H: へええ。ニューヨークのクラブシーンからそういう緊張感がなくなってしまった今となっては羨ましい話ですよ。自分は99年からニューヨークに住んでいますけど、もうそういう危険な匂いはニューヨークから完全に消えてしまっていたし。自分も経験してみたかったな。でも80年代のニューヨークのゲイ・シーンなんて、ドラッグを抜きには語れないようなところがあったでしょう？

SUNNY: そうだね、それに、その頃出回っていたドラッグってとってもハードなものだったの。まず、MADAっていうのがあってね、それはエクスタシーの三倍くらいの強さがあるの。最高に良かった(笑)それをクラブに行く前に取っておいて、行ったら今度はマリファナをダンスフロアで吸ったりして、あと、『ガス』を吸ったりして(笑)

H: え、『ガス』って何？

SUNNY: スプレー状のもので、それをタオルにしみ込ませるのね。スプレーだからひんやり冷たくて、それを勢いよく吸うと、またぶっ飛んじゃうの。最悪でしょ(笑)ひどいになるとダンスフロアでね、ハンカチ抱えたまま硬直して踊っているのなんかいたりしてさ。**結構笑えるんだけど。**

H: Sunnyさん、随分危険な生活していたんですね(笑)。

SUNNY: **凄く危険な生活していたのよ。**でもドラッグによっては、その時に何が起きたのか後で覚えていないことがあったのよ(笑)。ほら、お酒飲み過ぎちゃうと、記憶が飛んじやって断片的にしか覚えていないって言うじゃない？それと同じ感じかな。そう言えば、あんな事があったけど、その後一体どうなったっけ？という具合でね。その頃は自分の持ち物を無くす事も多かった。

(笑)

H: SunnyさんはSaint以外ではどんなところで遊んでいたんですか？

SUNNY: 90年代になるとイースト・ビレッジだとボーイズ・バーとか。あとはね、Roxyとか。本当に色々なところに行ったけど、バーはあまり行かなかった。ほら私、お酒を飲まないから。

H: アハハ(笑)

● アジア人差別

SUNNY: 私の友達に日本人のモデルの子が居ただけで、彼女はニューヨークではあまり仕事が無かった。ヨーロッパではモデルとして大受けして、アルマーニなどの仕事を全部やっていた子だけけど、ニューヨークでは全然ウケなかったの。その頃はね、ニューヨークではアジア人だっていうだけで、受け入れられなかったの。その頃唯一、中国人の女の子で目も整形して、アジア人特有の顔立ちなのに、アメリカのマーケット向けのメイクアップをしている子がいたんだけど、なんとというか(笑)

H: へー、そのころは人種のDiversity(多様性)は受け入れられなかったの？

SUNNY: 受け入れられなかった。80年代って、アジア人ー日本人、中国人、他の人も全て含めてーゲイの世界でも、他の世界でもニューヨークでは自分がアジア人だって言うだけで、誰も見向きもしてくれない。そういう時代。

H: へえ、自分の知り合いも言っていたけど、「クラブに行っ

ても周りの人に、目に見えてない振り」をされるって。

SUNNY: そうそう、そんな感じ。今でもアジア人に対する差別的な扱いは残っているかもしれないけど、比べ物にならないと思うよ。

H: 今だと、スタイリッシュでカッコいいアジア人の若者とかが出て来ているし。

SUNNY: そうなのよ。

H: その頃ってやっぱりアジア人って外見的にも見劣りがした??

SUNNY: アジア人の中でも日本人はかわいかったんだけど(笑)

H: わかるわかる。(笑)でもSunnyさん自身は差別された経験は無かったんですか？

SUNNY: 自分には無かったな。もしあったとしても、あんまり気にしなかったと思う。パリにいた頃にもう十分、自分が受けいられる、ってことを知っていたから、もしニューヨークで受けなかったとしても、それ程動じなかったね。

H: つまり態度が大事ってこと？

SUNNY: **そうそう、アティテュード。それが大事。**それに、そういう思いをあまりしなかったのは、すぐに恋人が出来たせいもあると思う。

● 仏教

SUNNY: 自分のアパートで仕事を始めた頃だけけど、人の紹介で仏教を始めたの。凄く力を入れたのね。その頃一緒に遊んでいた女の子の友達が薦めてくれて、初めは勿

論、イヤだったのよ。(笑)こんなのヤバイ、って(笑)宗教なんて意思の弱い人間のやることで、自分には全く興味もなかったし、変な辛気くさいモノを持って来られちゃった、って思って(笑)。でも結局始めてみたら私、凄く助かった。仕事の意味でも人間関係の面でも。宗教って、いいものなのね。やっぱり自分の人間性を高める為にあるものだから。もちろん、ちゃんとした宗教だったらの話だけど、中にはそうじゃないものもあるだろうから(笑)そういった意味では仏教の教えが自分の人間としての中身を良くしてくれたな、と思うよ。

さっきも話した通り、初め58丁目の6番街に住んでいたのだけど、ある時私の部屋に泥棒が入ってね。泥棒の正体はチリから来ていたスーパーの甥っ子だったの。その頃私は週末、ボーイフレンドのフィリップのところに行って過ごすことが多かったのよ。特に日曜日は自分がアパートに居ない事が多かったの。で、私がいなくて私のアパートにどうやら娼婦を連れ込んでいたみたいなのね(笑)。ある時、いつもの週末の過ごし方のパターンを変えて、うちに帰ってみたの。そうしたらね、エレベーターがなかなか来なくて、来ても誰も乗ってないのに一階一階止まるのよ。そのエレベーターにはドアに丸い窓が付いていて、自分の部屋に辿り着く間での間にその窓から一人の男の顔が見えたの。それが管理人の甥っ子だったのよ。で、やっと自分の部屋に入ったら、そこになんと女が居たの。酔っぱらってるのか、ハイなのか、私に聞くの、『あなたは誰?』って(笑)そんな事言われたものだから、私も思わず、『**ちょっと、待ってあんた、何をしてるのここで?ここは私のアパートなんだけど?**』って行ったらその女もちょっとうろたえて『あの男の人はどこに行ったの?』って言い出したから、私もあつって思って。

で、今度はうちの電話の請求書を見てみたら、その子が私の電話を使ってチリに電話を掛けていたの。請求書に長距離電話を使った番号で見た事もないものが載ってい

たの。自分に覚えが無いものだし、電話会社に電話を掛けて『請求書が間違っています』って言って、調べてもらったの。そうしたら電話会社の人がこう言うの、『この通話先は確かにあなたの電話を使ってかけたものですよ』って。『ええ??』と思って、これは一体どこの番号なんだろう?と思って調べたら、それがチリの番号だったわけ。管理人がチリ出身、そして私はエレベーターの窓からその甥っ子の横顔を見ている。

だから私、管理人を呼んで私のアパートで起きていたことを彼に伝えたの。彼自身は何が起きたか全く知らなかったから。お宅の甥っ子がこの部屋をそんな風に使っているって。そうしたら「そんな事は無い」って言い張るの。だから電話の請求書を彼に見せて。『この番号に見覚え無いかしら?この番号にこの部屋から電話を掛けた形跡があるの』って言ったら、彼はビックリしちゃって(笑)『アイム・ソーリー』って。それでもう、そこに住むのが嫌になっちゃったの。

● ファッション・ビジネス&MORISANE

次に移った場所が83丁目のコロンバス・アベニューのアパート。仕事に必要な広さがあったから選んだの。凄く汚いエリアだったけど、その頃凄く幸せだった、私。そのビルにはドアマンも居なかったし、すぐ隣はスパニッシュ系が住んでいるプロジェクト(低収入者住宅)だったし。だけど、凄く楽しかった。そこに住みだしてから、虚飾な自分を全部捨てて(笑)地味にスタートしたの。丁度一生懸命仏教を始めたころだったし。自分を着飾らずに、自分を捨てて一生懸命仕事を始めた。(笑)それが良かったみたい。そうやって一生懸命頑張らなかつたらビジネスもそこまで伸びなかつただろうし。そしてその後、36丁目の7番街にオフィス持ってから、自分のファッション・ショーが始まったの。小さなスペースだったけど、でも50人は呼べる位のお大きさがあって。**洋服というものは着てもらわないとイミないから(笑)**だってラックに掛けていたって着てもらわなきゃ、お客さんにコンセプトが伝

わらないじゃない?パツとしないでしょ、それだと。あの時代だと、こんなにティーズしたこんな大きな髪型、こんな大きなショルダーを入れて、って時代だったからね。それだとシックじゃないでしょう?自分としてはシックなイメージのものを追っていたからね。

これは88年のコレクションだけど(写真)私縫うのが嫌いで(笑)同じ商品でも私が縫ったものと縫子さんが縫ったものではとても同じものだとは思えない位違った(笑)だから、縫わなかったの。もうどうしても、っていう状況を除くとこの時代は全然縫ってない。

H: じゃこの時代はデザインをして、生地を渡して、パターンを渡して。サンプルは自分で作るんですか??

SUNNY: サンプルは全部自分で作った。インハウスで全部作って。アシスタントが居るからその子に指示しながら。キーポイントの方は全部自分でやって、**細かいところとかつまらない仕事だけを他の人に押し付けて(笑)**

H: (笑)ねえ、Sunnyさんってどちらかって言うと、主導権を取りたいタイプなの?

SUNNY: そう。(笑)私って人に使われるタイプじゃないの、**悪いけど(笑)**

H: (笑)へえ(笑)でも気配りはするでしょ。

SUNNY: 私、A型の人間だし、そこそこ気配りを周りの人に対してするとは思うよ。でもどっちかって言うと、私は人に指示したりとか、企画をしたりする方が好きなのよ(笑)。

H: (笑)成る程ね。レディースだけでなくメンズ・ウェアも手掛けていたんですね(写真)。

SUNNY: そう、私のメンズは凄く人気があったの。あの時代、メンズのデザインで遊んでいる人が他にいなかったから。ただショーの時に、男性が側に居たら良いな、って思って始めただけで、初めのうちは売れるつもりすらなかったの。フィリップがショールームにいる事も多いし、着る物が必要になって来て。彼としても洋服を買いに行く時間も無い、というところから始まって、広がっていった、そうそう、大体ね、ラッキーな事に80年代って、ニューヨークでファッションをやっている日本人っていなかったの。

H: (笑)へえ、意外、それは。

SUNNY: ファッションと言っても自分みたいにショーをやっている日本人が居なかったって意味だけど。日本の広告やファッション雑誌なんかでも取り上げる人が居ないのよ。ラッキーな事に私くらいしか(笑)森英恵さんなんかはいたけど、私達のような小さな規模でファッションやっている人は居なかったの。それでレディースとメンズの両方と1982年からはコレクション、つまりファッション・ショーを始めたの。

H: どうやってその資金を調達したんですか?

SUNNY: **お金なんてものは全然無かったよ(笑)**

H: え、お金がないのにどうやってコレクションが出来たの(笑)?

SUNNY: 言われてみれば確かにそうだよ、お金がなかったのにどうやってやったのか、今となると自分でも分からない(笑)アハハ。珍しいかもね。

H: 珍しい?(笑)

SUNNY: (笑)

● MORISANEのビジネス状況

H: SunnyさんのMORISANEでは誰がビジネス面を切り盛りしていたの？

SUNNY: その当時のボーイフレンドのフィリップがビジネスの面倒見てくれていた。でも彼もアート系の人間だったから、私の会社で一番弱かったのはビジネスの部分。二人ともアート、ビジュアル専攻で来ているじゃない？だからビジュアル面では最高に素敵だったんだけど(笑)要するに私達は見せる、ってことにしては良かったのよ、すごく。(笑)こだわりなんかも凄くあってさ。だから外側の人間にはすごく羽振り良い会社のように見えたと思う。大きなショールームも含めて全て。だけど実際お金は無くって(笑)。ビジネス的にはガタガタだったの。楽しかったけれどね。まだ若かったし。エネルギーがあったから。

そもそもは、ニューヨークにいる人達に、うちの洋服を着てもらいたいって気持ちからスタートしたの。カフェに行って座っていたらとなりに座った人がうちの洋服を着ていた、という感じ(笑)。そういうのが見たかったのよ。とにかく沢山の人が着てもらいたい、って気持ちがあったから、出来れば商品の価格帯も低くしたかったのだけど、ニューヨークで洋服を作っている限り、どうしても一つ一つの洋服が高くなってしまふ。だから値段層だけで見るとハイ・エンドな物になってしまうわけ。だからマーケットとしてはそれにお金を払える人達にターゲットを置かないと財政的にやっていけなくなるの。結果としてそのターゲットを中心に動かざるを得ないわけ。ビジネスに関しては全くの素人だったから、やっていくうちに覚えていったんだよね、ひとつひとつ。失敗なんてしょっちゅう。でもファッション・ショーに関しても『やりたいな』って考えていたら本当に出来たの。そしてお金が入って来て。でも入ってくるお金と出て行くお金って殆ど一緒だった。だから一銭も残らない。でもまあ、良

いのよね、それって。(笑)結局プラス・マイナスが無いわけだから

H: 日本でもMORISANEは有名なブランドだったでしょ？

SUNNY: ライセンス契約で自分の名前を使って日本でも色々出ていたの。でも自分はライセンス・ビジネスというものが何なのか良く知らなかったのよね(笑)。自分の結んだ契約のケースでは、日本には日本でMORISANEの為にデザイナーがいて、こちらが作ったコレクションを『日本ではこれが売れる』ってモノに作り換えてしまうのよ。今となると向こうは向こうで大変だったのはわかるのだけどね。向こうとしたってやっぱり売れるものを作って売らなきゃならないじゃない？例えばその時に日本でグレーのスカートが流行っているとしたら、たとえニューヨークで出したものがピンクや赤だったりしても全部グレーに変えられてしまうの。日本での最初のコレクションは、凄く成功したの。日本では今まで無いスタイルだったし、当たるのよね。にもかかわらず、ビジネスの土台がしっかりしていない為に売り上げの回収が出来ない、っていう問題にぶち当たったの。それから、名前だけ貸す形になって。日本でMORISANEの展示会を開くことになって、自分が会場に行くでしょう？その時に初めて日本での自分の商品を見るわけ(笑)。『え？何これ？MORISANEって名前が付いているけど、自分のじゃない！』ってね(笑) **何だか変なのが一杯あった(笑)**

H: そういう場合はどうするんですか(笑)

SUNNY: 正直言ってもう手遅れ、どうしようも無いわけよ(笑)だって展示会の翌日にはもうバイヤーが来てしまうから。で、バイヤーは私に聞くの、『このジャケットってどういう風にコーディネートしたら良いんですか？』って(笑) **でも私にも分るわけ無いのよ!**『これは私が作ったのではなくて日本サイドのデザイナーが作ったものなので私にもわかりません』って正直に言えば良かったの

かもしれないけど、とても言えない自分がいて(笑)さすがにそれは言えないじゃない?だから**仕方ないからその場でスタイリストになってコーディネートしてあげた(笑)**。このことが分ったとき、自分は自分のコレクションを全部目を通して、どれとどれを組み合わせれば一番、MORISANEらしくなるのかってことを頭に入れておかないと大変なことになると思った。でもとにかくお金が入って来るし(笑)、それからは諦めた。

H: (笑)でもビジネスライクに捉えたら、日本の部門だけでも残しておけば良かったのに。入ってくるお金という面だけを考えたら。

SUNNY: そうだね、いやあ～、確かに日本側のスタッフがもう少し理解してくれていたら頑張ってみたかもしれない。絶対にビジネスを潰さずにとっておいて、こっちやあっちと色々ネゴシエートして、続けていたかもしれないよね。でもその時は嫌で嫌で(笑)そうやって来るともう、お金の問題じゃない、嫌なものは嫌(笑)。たまに自分の名前の付いているものなのに、自分のデザインとは全く関係がなかったり、それどころか『嫌だなこれは』と思うのがあったりして、もう耐えられなかったの(笑)

H: Sunnyさん、もし病気にならなかつたらこのファッションっていうビジネスを続けていたと思う?

SUNNY: 絶対続けていたと思うよ。他に何やって良いか分からないし。アハハ(笑)

H: 仕事のストレスは凄かったでしょう?

SUNNY: それはもう凄かった。

H: プレッシャーも。

SUNNY: プレッシャーももちろん(笑)まあどんな仕事にしてもそうだろうけど、上にたてば立つ程、自分の収入が多ければ多い程、絶対にストレスを多く味わうことになると思う。それは月々出てゆくお金、例えばショールームの家賃、スタッフのお給料、自分たちの生活費を捻出して、プラス次のコレクションの為の準備の為の資金を作らなくてはならないでしょう。ファッションって一つのサイクルが6ヶ月なの。商品を作って、そのお金を自分で全て出して、それを納入して、それから6ヶ月後にお金が出る、って仕組みなの。

H: それじゃあその6ヶ月の間は自腹で生活費やショールーム、スタッフのお給料などのお金を持たせなきゃならないってこと?

SUNNY: そう。それに6ヶ月の間に私がつぎ込んだお金が私のところに100パーセント戻ってくるって訳ではないの。

H: それはどうして?

SUNNY: バイヤー側が色々理由を付けてくるの。向こうも買い取りのシステムだから、売れなかつたら自分たちがお店でそのリスクを受けていかなきゃならない。それから逃れる為に、わざと傷をつけて返して来たり。例えば Bergdorf Goodmanの場合だと、商品が売れなかつた時には、バイヤーがその責任を取らなければならないのね。ま、その時売れなかつた理由も分かるんだ、見に行ったらその商品が棚の奥の奥に飾ってあるんだもん(笑)**誰もこんなんじゃ、商品を見ることも出来ないし、まして売れる訳無いじゃん(笑)**なんて言っていたのだけど、結局そのアイテムは残っちゃったのよ。それをこちら側で買い取りして、向こうはそのお金で次のコレクションを買うっていうような取引を行ってね。でも10年ビジネスをやったこと、これはいい経験だった。随分高くついたビジネス・スクールだった

けど(笑)

振り返ってみるとニューヨーク・コレクション、メンズとウーマン両方を手掛けて、80年代の終わり頃には日本の会社とライセンス契約を結んで。お金の動きがすごく大きい時期を経ながら経済的にも割と上手く行っていたの。一気に事業が成長したお陰で、自分とはとにかく仕事が忙しくなっていて、前まで遊んでいた友達と遊ぶ機会も無くなってしまっていて。皆と合うのはお葬式だとか、病気の友達のお見舞いに行った時だったりしてね。90年代になって、パートナーとして仕事に入ってくれていたボーイフレンドのフィリップと別れたのだけど、彼がニューヨークを離れてサンフランシスコに移住したのよ。そこで肺炎にかかって入院したの。その時、病院側に彼にHIVの検査を勧めたのよ。彼は肺炎に感染していたし、ゲイでもあったから。それで検査してみたところ、彼に**ポジティブの結果が出たの**。

彼はすぐに私に電話を掛けて来て、『Sunnyもすぐ検査した方がいいよ』って。私、自分でも何となく分っていたのね、自分が感染していること。それに彼の方も何となく自分自身の感染に気付いていたから、お互いにそれ程ショックでもなかったの。逆にいい機会だな、って思った。このきっかけで自分の体の状態を知ることが出来たし。私も仕事が忙しくてことを理由にして自分の体の状態に目を向けなくて来たところがあったけど、自分の状態をちゃんと見てみようと思って。で、検査を受けたら私にもポジティブという結果がでた。その頃ってAZTが無かった頃だから、ストレスで自分の人生を短くするか、それとも自分のことをケアする方を取るか。どっちかを選ばなきゃならなくなったの。その時にやっぱり事業をたたんで、自分の体を中心に考えて生きていこうって決めて。で、90年に会社を閉めたの。フィリップが死んだのが94年。その時入院費やら治療費やらお金は殆ど全部っていい位出していたし、お金がもう全然無いのよ。(笑)フィリップと一緒に自分も死のうと思っていたしね。彼が死ぬ前って、色々看病で忙しくて

自分の事を忘れていたの。彼が亡くなってから自分がニューヨークに帰って来て『**あ、家賃が溜まって**る』(笑)色んな事が心配になって来てね、お金が無いものだから。(笑)これじゃ仕事でも探さないと生活して行けない、って思い始めて作ったのがこのポートフォリオなの。結局使わなかったけど(笑)取っついて良かったわ。(笑)

● ファッション業界について

SUNNY: ファッションは好きだったのよ。今でも、そのクリエイティブな部分だけで言えば、好きなのね。でもファッションっていうビジネスの汚さって独特よ。で、業界にいる人達って多くの人自分自身のやっているファッションに対して疑り深くて、自分が作ったものが本当に良いものなのか、自信が無いの。その不安を今度はメーカーに押し付けて、自分のことを守ろうとしたり、**いきなりビッチになってみたり(笑)**他の有名な人の名前をあたかも自分の友達のように口にしてみたりするの。『自分はある人知ってるよ、この人知ってるよ』ってね。で、あなたは何者なの?と聞いてみると自分は何者というわけでもない、そんな感じの人が一杯いてね。

H: でもSunnyさんはそう言った事とは全く無縁そう(笑)

SUNNY: 無縁だったよ。(笑)でも自分が業界にいて、名前が外に出れば出る程、人は自分のところに寄って来てしまうでしょう。この人達はお友達として、誠意を持った付き合いを求めて、自分の周りに近寄って来ているんだろうと思って私は人と付き合っていた訳よ、自分の扉を全部開けてね。(笑)その時自分は何も分っていなかったの。そうしたら、**私が会社を閉めた途端、その辺の友達は一切消いなくなった**。その時始めて気が付いたの。そりゃ、その頃の友達の何人かは残っているわよ、勿論。でも考えてみると殆どの人が自分自身の為だけに、私を利用していた、ってこと。ま、仕方ないよ、皆そうやって自分のキャリアにプラスになるもの

をどうやって自分の周りに確保していくか、ってことで手一杯だからさ(笑)。自分と関係無くなった人のことは知りません、って態度をとるのは理解はできるのだけど。でも、そういう昔親しくしていた人達の手の平を返したような態度を見た時に、すごく傷ついた。ま、自分も甘かったと思うよ。ファッション業界の人間なんて、そういうもんだ、って知っていて自分が対処していれば、そこまで傷つかずに済んだと思う、でもその頃はまだ若かったしナイーブだったからね。

H: そういう友達はやっぱりファッション・ビジネスを通じて出来た友達だったの?

SUNNY: そう。ファッション・ビジネスをやっていく中で知り合った人達だけど、うちのディナーに招いたりして個人的な付き合いをしていたの。彼等の事を自分の友達だと思っていたのに、違っていた(笑)、それが唯一辛かったわね。

H: 彼等が自分の友達じゃなかった、ってどうして気付いたの?

SUNNY: 会社を閉めた後、しばらくしてからそういう連中の一人に知りたいことがあって電話をしたとするじゃない? 例えば『これはどこで買えば良いんだろう?』みたいな他愛も無いこと。で、メッセージを残しているのに相手から連絡が無い。他には、例えば道でバッテリー誰かに出会ったとするじゃない、すると一言『あんた、今一体何をしているの?』って投げつけるように私に言うの。人の気持ちを落とすような言い方で。そういう人の事をバカにしたような言い方じゃなくて、もうちょっといたわりのある言葉を言えないの?』と思ったりした。そういう時に悲しい気持ちを味わったよね。

H: そういった類いの不信感を体験したら、外に出たくなく

なっただしょう?

SUNNY: そうだね、出たくない。それにお金も無くなってから、なおさら。(笑)

そういう経験をしてからファッション・ビジネスに対する考えが変わったのもあるし、ファッション・ショーを見たりするのもね、長い間避けていた。やっと最近は見えるようになったけど。ファッションの雑誌も読まなかったし、読みたくもなかった。うんざりしていたの。だって見ればすぐに裏の世界がどうなっているのかが全部、想像つくから。今だと自分がそこから完全に抜けた状態だから、第三者として見る事が出来るけど。色んなパターンを見て来ているのよ。例えばトミー・フィルフィガーやマーク・ジェイコブス。トミー・フィルフィガーが、初めどんな風だったのか。彼等がシーンに出て来て伸びていく様子。ビジネスとしてのバックアップがしっかりしているとやっぱり伸びるのね。デザインのカだけじゃないの。ずっと長い事見て来て思ったのだけど、アーティスト肌でクリエイティブな面で優れていたデザイナーがいたとするでしょう?でもね、ビジネス面でしっかりとしたパートナーがいなかったら、その人はやっぱり伸びていくのが難しいのよ。一旦始まってしまうとファッションもやはりビジネスとしての側面が先行するの。しっかりしたビジネス・パートナーがいるところはデザイナーが仮にそれほど優れていなかったとしても伸びる事が出来る(笑)。本当だよ。それを見せてもらった。だから若い人でファッション業界でやっていきたいと考えている人に、アドバイスしておきたいの、絶対にビジネス上での優れたパートナーが必要となるってこと。ビジネスの上で信頼できる、しっかりとした人と組むことが大事。

H: お金をだまし取られたことは?

SUNNY: ある(笑)でもこれもビジネスがちゃんと出来てい

ないから起きたこと。ビジネス面でしっかりした人がいれば防げたことだと思う。月々の経費を捻出する為にブティック側はそのシーズンの商品を購入するでしょう?で、彼等は6ヶ月後には私のブティックが閉まるって知っている。こちらはその商品が売れたお金でこのビジネスを整理しようと考えているのに、向こうは支払わないの。一か月後にその支払いを私達が受け取るはずなのに。コンタクトをしても、なんだかんだ言い訳をして残りの日数を押し切ってブティックが無くなったのと同時に何処かに行ってしまった。それが仮にニューヨークの中で起きたのなら話は簡単だけど、ニューヨークの外、例えばサンフランシスコだとか、ダラスにあるようなお店だと、回収に行けないの、遠過ぎて。時間も無いし、行ったとしてもちゃんとお金がもらえるかどうかは分からないしね。そんなことが沢山あったよ。それが80年代の終わりでアメリカが不景気だった頃。回収出来なかったのもかなりの金額。

H: 自分のファッションのアイデアを盗まれたり、なんてことは?

SUNNY: **そんなのしょっちゅうだったよ(笑)** コピーされた時は最初、頭に来たんだけど、ある意味、嬉しくもあった。良いからこそ皆からコピーされるんだ、って思ったから。コピーされたってことで逆にプライドになったのよ。自分の中では『あ、私、良いものを作っているんだな』って思えたし。

H: ビジネスそのものは好きだったんですか?

SUNNY: うん、好きだった(笑) デザインよりももしかしたらビジネスのほうが好きなのかな?とったりした(笑)

H: Sunnyさんのファッションに対する人からの反響を見るのも楽しかったでしょうね。

SUNNY: 商品を買った人が着てくれているってことが嬉し

かった。それが何より。で、ただ着ただけじゃなくって、うちのMORISANEを着ることによってその人のライフスタイルが少しでも良くなってくれたら良いな、って思ったの。仕事の面接に私のデザインした服を来て行ったら仕事が見つかったとか、そんなのでも良いし。

H: もしSunnyさんがタイムマシンに乗って、ご自分のビジネスを始めた時期に戻ることが出来たとしたら、どうしますか(笑)? 現在持ち合わせている知恵と経験はどんな風に使いますか?あと、どんな畏に気を付けますか?

SUNNY: これは良い質問だね。(笑) そうだな、まず間違いなく、**ビジネスの学校に行く**と思う。忙しくて時間が無かったとしても、ビジネス・スクールに行つてある程度のベーシックなビジネスの構造を勉強しておきたい。例えば税金に関することやお金の流通、ビジネスを大きくする為にどういった要素が必要なのか。もっと詳しくいえばライセンスとは何か、といったようなことまである程度、知識を持っていたほうが断然プラスになると思う。そういった知識を持たないでビジネスをすると凄くお金が掛かるの。失敗が多いから。もちろん失敗すると、そこから学んで学習するわけよ、次から失敗しない、って。でもその度にお金がかかっちゃうでしょ(笑)。

H: 多分Sunnyさんが過去にファッション・ビジネスを経験している分、ビジネス・スクールに行つても『これは大事だ!』っていうコツとか、何が大事なのかがすぐ分るんだと思う。(笑)

SUNNY: そうそう。凄く真面目に授業に出ると思うよ(笑) 明日仕事に戻ったら早速昨日学校で学んだことを実行して、って感じで。(笑) あとはね、**ビジネスがある程度大きくなったらビジネスの面でクリエイティブな人を入れなきゃ駄目**。例えばマーケティングの戦略だとか。自分も勿論、最低限のビジネスの知識を持つのが必要なのはさっき

ったけど、自分がデザインを上手に出来るとしたら、他にビジネスが上手な人が必要になってくるの。ビジネスの分野の中にクリエイティブな才能を発揮する、まるでアーティストのような人もいるのよね。そういった人と組んでビジネスをすると良いの、絶対。デザイナーとしては残念なことだけど(笑) そういったビジネス面が上手く行くとあまりデザイン面だとかプロダクトそのものが良くななくても、ビジネスは伸びるのよ。

H: じゃあ、ビジネスの勉強を徹底的にしろってことですね?

SUNNY: 絶対にしたほうが良いよ。ホントに。それだけはやっとならば良かった、って思ったもん。ただ知らなかっただけで、単に洋服を作って売りたいっていうことにしたって、考えてみれば立派なビジネスなのよ。洋服をデザインして作る、って部分は確かにデザインなんだけど、それを売るって部分は完全にビジネスだってことが分らなかったの。だからその部分は別なエキスパートに任せるべきなのよ。

H: なるほど。では、『人』に関してはどうでしょう?例えばビジネス面で成功したらその分、色んな人間を寄せ付けることになるでしょう。その中には良くない人も沢山いるじゃないですか?

SUNNY: そうそう。やっぱり自分もそこでは痛い思いをしたよね、私としてみれば皆友達だと思って接していたわけで(笑) その人達が自分達の利益の為だけに私に近づいて来ているって見抜けなかった。最初からこの人達はビジネスが目的で自分に近づいて来た連中だ、ってことさえ分っていたら、悲しい思いをしないで済んだらと思う。人に

こんなこと言われたの、『人が自分のところにやって来た時は、この人は自分から何かを奪っていかうと企んでる、って考えなさい』って。でも自分には出来なかった。だってそれって、結構淋しいことじゃない?出来ないよね、そんなこと。そんな風には人とは付き合えないもん、私は。だって人と付き合う時ってというのは相手と自分が一緒にいて面白いから、楽しいからこそでしょ?

● 真如苑

ところで仏教はSunnyさんがビジネスをしていく上で、また人間関係の上でも助けになりましたか?

SUNNY: 凄く助けてくれた。真如苑っていう名前の宗派なんだけど。この間も考えていたんだけど、自分が10代で日本にいる頃から、カルチェの三連のリングとか時計だとか、ゴールドのライターを持っていたの。でもこれって自分で買った物じゃなくて、皆貰い物だったのよ。よく考えてみると、結構周りの人から良くされて来ていたってことなのよね。で、それからパリに行ったでしょう?で、パリの人って男か女か分からない、ユニセックスな子を賞賛するところがあって(笑)。そのお陰で凄くモテたの。日本だと、こういうタイプがモテる、アメリカでもあいうタイプがモテる、とかいうのがあるじゃない?フランスではどっちかっていうとユニセックスなタイプがウケるみたい。だからずっとチャホヤされてた。で、その後ニューヨーク来た時もさ、私は何だか鼻が高い感じの子だったの。私パリから来たんだもん(笑)って感じで。生意気なやつだったのよ。分かる?他の生意気なタイプに出会うと『で、あんたはどこから来たの?』って聞いたりしてさ(笑) そんなタイプだったのよ。

でもね、仏教の修行って無の修行から始まるの。自分の中のプライドとかを全て取り去ったゼロからのスタートなの。83丁目の広いけど、汚い(笑)アパートに移って、質素な生活を始めたでしょう?その時にそれに挑戦してみた

の。短い間だったけど、あの経験しておいて本当に良かったな、って思う。あれが無かったら、苦しい生活を送る人の気持ちとか苦労している人達の気持ちが全然分からなかったと思う。あの時期があったからこそ、人の気持ちがわかる。そういった意味で仏教はね、いつも形を変えてで私の事を助けてくれていた。

H: 成る程。自分の場合、他人の心ない発言や行動を聞いたり、見たりした時に思うのは『何でこいつはこんなことを言ってしまうんだろう?なんでこんな行動をとるんだろう?』って事なんです。ムカつきながらも逆に相手に更なる興味が湧いてしまったり(笑)分析したくなっちゃうんですよ。その人間の思考回路、モラルについて知りたい、って。だから自分、世間からとか、周りの人から悪口を言われまくっている人間にかえて興味を持っちゃったりするんですけど。

SUNNY: (爆)

H: でも、Sunnyさん、そういった人達のこと許す、許さないでいったらいつも相手の事を許していた?

SUNNY: 許してたよ、いつも。

H: ただちょっと傷ついたり。

SUNNY: 辛い(笑)。淋しいんだろうね。

H: それって結局その相手が弱ってことですよ?

SUNNY: いや、結局自分も弱いんだと思う。もう少し、自分が人間として出来ていて、人間というものをちゃんと分かっている、人というものを見抜く能力があれば、こんなに傷つかずに済んだのに、って思うから。早い話、ウブだったわけよ。ウブであった分、こうして傷ついたから。次にもしこ

ういう業界、外見だけは派手でも、裏では醜いことが起きている業界と関わる事があっても、今度はそういう人の見分けが出来ると思う。その時は自分が傷つかずに済ませられる、っていう自信はあるよ。だから終わってみると良い経験ではあったよ、人を見る目を培ったという意味では。全てのネガティブをポジティブに考えたいじゃない?(笑)

それに**仏教を通じて、人生の中に沢山あった疑問符がひとつずつ無くなっていった。**若い頃からの『どうしてこういことが起きるんだろう?』というような自分の中の疑問に対する答えが一つずつ分っていったの。『あ!そうなんだ!』って。

H: そういった答えはどんな風にして分ったんですか?

SUNNY: 20代の頃、いつも秋になると落ち込んでいたの。『こんな風に、何もせずチャラチャラ遊んでばかりいていいのかな』とかってさ。周りの皆がチャホヤしてくれるから調子に乗ってその場に流されちゃって、それにふと気付くのがいつも秋だった(笑)。それで落ち込んだりしていたの。仏教を始めた時にそれが無くなっていった。そういった悪循環が無くなったの。結局それは自分が仏教をやり始めたことで出来たのだと思うのね。あの頃若かったし、頭の中にやりたいことがいつも一杯あった。『あれもやりたい、これもやりたい』って。で、やりたいことだらけなのに行動が無かったの。これは仏教で説かれていることなのだけど、『**良い因縁でも悪い因縁でも原因があって起こる**』。つまり、**いい結果を起こすには良い原因を作り出す必要があるわけ。**別の言い方をすると頭だけで考えているだけでは、何も良い結果は起きないということ。そこに気付いて、自分から行動し始めた。そうしたら結果が出て来た。その結果を見れば、自分のやったことが正しかったか、それとも正しくなかったかは分るでしょ。そうやって生きてきた。そうしたらね、意外と上手く行った。

H: それでは、ビジネスが成功したことでSunnyさんという人間が変わってしまったことは無い?

SUNNY: 別に無かったと思う、私。これもやっぱり宗教のお陰よね。いつもベーシックに戻そう、戻そうという修行をしているわけだから。全てに感謝をする心を持つことだとかさ。仏教を知らなかったら感謝の気持ちが無くなって、鼻が高くなっていったと思うの(笑)何につけ、自分がやってあげている、っていう気分になっていたと思うけど、『させて頂いています』っていう気持ちになっているから、いつも(笑)

● Boy Oh Boy

H: ねえSunnyさん、初恋はいつだったの?

初恋?早かったよ。小さい頃、小学校の3年生の頃にはもう気付いていたのね。その頃って隣の席に座っている誰々ちゃんが好き、みたいな事よく話すじゃない?で、女の子はどの男の子が好きなのか、話しながら皆で盛り上がるよね。でもみんな小さかったから何にも感じてなかったみたいだけど、自分だけは『あれ?』って思っていたみたい。自分は男の子の方が好きなんだって。(笑)ちょうど小学校6年か、中学校にはいった頃、辞書で同性愛って言葉を調べたら、病気じゃない、って書いてあったから、大丈夫、これでいいんだ!って(笑)。でもそのとき思ったのが、どうして自分みたいな人が、周りにいないんだろうってこと。でも、ごく普通の子だった。とっても優秀で勉強のできる(笑)生意気な。

H: Sunnyさんのタイプってどんな感じ(笑)?

SUNNY: いや、意外とね、どんなタイプも好きなの(笑)

H: ふうん(笑)でも日本にいたときは、どんな彼氏だった

の?日本人?それとも外人?

SUNNY: 日本にいたときは日本人の、あ、でもあいつはハーフだった。でも**基本的には人種にはこだわり無いよ。だっていいものはいいから。おいしそうなものはおいしそう。(笑)かわいいものはかわいい(笑)ってね。**そういうところは今でも変わらない。

H: Sunnyさんは彼氏が出来たら浮気はしないの?

SUNNY: しないね。彼氏がいないときはうんと遊ぶけど。もの凄く遊ぶ。でも、いた方が自分に取っては良いみたい。色んな意味で。友達に言われるもん、『Sunnyは恋人を作りたいタイプだから』って。

● HIV

SUNNY: 今はもう死んじゃったけど、ウォーリーって友達がいて、一緒にお風呂屋さん(今で言うゲイ・サウナ)に行ったのね。そうしたら彼が『ねえ、サニ子、ちょっと来て』って私を呼ぶの。『そこに張り紙がしてあるんだけど、なんかゲイの間で流行っている、変な病気があるみたいよ』って。その時が、自分が初めてエイズについて『へー、そういう病気があるんだ』って知った瞬間。でもその時はそれだけだったんだけど、その3年後、1983年に私の友人の一人が初めてエイズで亡くなったの。自分の周りを見てもアメリカ全体を見ても最初にエイズで亡くなっていった人達の一人だった。で、その後も日本から来たゲイのヘア・スタイリストの若い子達、おそらく15人位と知り合ったけど、80年代の終わりまでに**全員死んじゃった。**で、私とあともう一人だけ、80年代を生き残ったの。で、その残った彼も2年前に死んじゃった。80年代を振り返ると、私の周りではエイズで人が毎年毎年死んでいった。自分の友達、友達の友達、そしてついには私のボーイフレンドも死んだ。まずは病院で、そして次はお葬式で友達に顔を

合わずでしょう?でもその頃は皆、検査を受けるってこと、あまり考えなかったのよ。私も、自分がわざわざ検査を受けようなんて気持ちにならなかった。皆もそうだったのじゃないかな。もしかしたら自分もHIVに感染しているかもしれない、とは思ったよ。皆と同じ風に通っていたし、その皆が同じように死んで行っていたんだから。いつかは自分の順番が来るんだろうって感じてた。それをただ、待っていたのだと思う。

で、90年になってから自分がHIVの陽性だということが判明してビジネスをやめて、自分自身のケアに入ったでしょう?その時から本当の自分を見つめる時期に入ったの。自分のボーイフレンドが94年に亡くなって、お金も無くなって、それから、自分自身が本当にどん底まで落ち込んだ。そんな中で95年に薬のコンビネーションが始まったの。で、98年までには結構、体調を回復した。それまでは体調が悪い時期もあったりした。体重も落ちたりしたし。病気になって入院した時にお医者さんに教えてもらったのだけど、人間の体って、エネルギーを筋肉からとるらしいの。だから筋肉を付けた方が良くって言うわけ。それでジムに行き始めて。ほら、まだ筋肉が残ってるよね(腕をまくる)。

● Philip

H: 94年にエイズで亡くなった彼氏のフィリップとはどうやって出会ったんですか?

SUNNY: The Saintのニューイヤーズイブのパーティーで。二人ともドラッグでぶっ飛んでたはずなのに、よく私のことがわかったな、って思う(笑)それからはずっと一緒。

H: 彼とはどれくらいの間付き合っていたんですか?

SUNNY: 9年間。長かった。私は彼と一緒に年取って、一緒に死んで行くんだろうって思ってた。二人とも老人になって、テラスに置いたロッキング・チェアに並んで座っ

て、海と夕日を眺めたり、みたいな(笑)それで、二人で人生を振り返って『あの時は楽しかった、この時はああだった』って話しながら。

H: そんな老後、実現したら最高ですよ〜。

SUNNY: でも人生はそんな風に簡単には行かないものだって、そこで勉強になった(笑)人生は自分の思ったようにはならないって。本当に何が起きるか分からない。その繰り返しだよ。

H: フィリップはどういうタイプの男性だったんですか?

SUNNY: 私の友達が口を揃えて言うのは、とっても素敵な人だったってこと。特に女性がそう言っていた。皆彼に恋しちゃったみたい。彼が死んでから、皆に言われた(笑)

H: 落ち着いたタイプ?それともやんちゃな感じ?

SUNNY: 彼は落ち着いているタイプではなかったよ。若かったしね。いつも部屋の中に彼の笑い声が響いていたよね。とにかく、凄くいい人だったよ。穏やかで、優しい。割とハンサムだったし。だから皆に好かれていたの。色んな事を細かくやるし、常に行動しているし。ああいう人っていないよ。勿論彼も根っこの部分ではクレイジーだったけど(笑)。

H: でも90年頃に別れていますよね?

SUNNY: そう、90年頃に別れたの。それで向こうはサンフランシスコに移って、私はこっちに残って。

H: どうして別れてしまったのですか?

SUNNY: そうだね、会社を閉めたじゃない?それが彼にとってかなり辛かったみたい。まず今まで凄く忙しかったの

に何もする事が無くなってしまったでしょう。彼はそれを自分のせいだ、って考えたのだと思う。すごく落ち込んでしまって。彼のせいでビジネスが失敗した訳ではないの。どうしても避けられない状況だったにも関わらず、彼はそんな風に受け止められなかったみたい。もしかしたらああ出来たんじゃないか、こう出来たんじゃないか?とか考えてしまったんだと思う。『こんな状況にならなければ、Sunnyも傷つかずに済んだのに』って。優しい子だったから。

H: 彼がサンフランシスコに行って、感染している事が判明してから亡くなるまで彼の面倒を見ていた、と先程話していましたが。それはどのくらいの期間なんですか？

SUNNY: 3ヶ月間。良かったよ。自分が一番幸せな時だったかもしれない。悔いなく、自分の一番好きな人が死ぬまでの間一緒に過ごせたから。死ぬときも彼が自分の腕の中で息を引き取って行ったしね。

H: それは病院で？

SUNNY: もう病院にいても手の打ちようがない段階だったから、お家で引き取って看病していた。勿論病院側では彼のことを預かって構わなかったのだけど、フィリップ本人に聞いたら病院は嫌だ、っていうから、看護婦さんに毎日うちに出向いてもらって。色々細かい事をお世話してもらって。

H: その頃フィリップの体はどういう状態になっていたんですか？

体中相当痛かったみたい。あちこち壊れて来ているわけでしょう。喉にはカビが一杯生えて来ているから、食べ物喉を通らない。冷たい牛乳を飲ませても喋れない。その代り彼は目で合図をするの。私達の質問に対して1回のまばたきだったらイエス、2回まばたきしたらノーって具合に

ね。その頃はもう目も見えなくなっていたんだけど。最初彼に投与されていたのは痛み止めだったのだけど、それがモルヒネに変わってね。モルヒネの投与って、最後の段階だって事を表すの。お医者さんから言われたの。『このボタンを一回押すと静脈の方からモルヒネが一回分彼の体に投与されます。2回押すと、その量が2倍になります。押せば押すほどこの薬は強すぎるので彼の体は次第に弱っていきますよ』って。彼の体はもう殆ど死んだ状態だったけど、それでも自分にはボタンを押すことが出来なかったの。このボタンを押せばフィリップは痛みも無く、死んでいく事が出来る。彼の家族も疲れ果てている。(彼が亡くなれば)皆、家に帰れるわけじゃない?2ヶ月もそういう状態が続いたし、フィリップも誰かがボタンを押すのを願っているのがわかるのよ。で、フィリップのお姉さんとフィリップについて話をしたの。で、結局彼女がボタンを押してくれてね。

H: そのモルヒネの投与は一日に一回押す、という風に決まっているものではないんですか？

SUNNY: 初めは自動的に(モルヒネの量が)コントロールされていたのよ。だけど、それが途中から手動に変わったの。だから周りの人間が判断してボタンを押すの。フィリップのお姉さんが、フィリップもこういう状態だし、家族も疲れ切っているからってことで、もうガンガン(笑)ボタンを押したのよ。でも良かったと思う、これで。その1日前か2日前に私が彼の看病をしながら、ベッドの横に座ったりして色々話しかけていたの。彼も喋れなかったけど、調子が良さそうだったから。他愛も無い事を。『窓のところにこの間、薔薇が咲いたんだよ。もう秋なのに。色は黄色でね、すっごく綺麗だったよ』なんて言って。そのうちに私、居眠りしちゃったのね。朝晩ずっと看病していたから、体も凄く疲れていたんだと思うのね。そうしたら夢の中でフィリップが『自分はもう死にたいけど、どうしていいのかわからない』

って言ったの。それでびっくりして目が覚めたの。

だからね、お姉さんがボタンを押してくれた時、嬉しかった(笑)。自分じゃボタンは押せなかったから。それにフィリップが一番、喜んでいたのかも、と思う。最後は凄く痩せちゃって。エイズ特有の痩せ方だった。

H: 彼が亡くなったのは感染が判明してからどれくらい後なんですか？

SUNNY: HIVのテストを受けたのは90年の2月なのね。でもほら、私達二人とも80年代にニューヨークに来ているでしょう？お互い知り合う前からフリーセックス、フリードラッグの時代を経験していたから(笑)フィリップの周りでも本当にたくさんの方が亡くなったし。だから4年後かな。

(写真を見ながら)これが90年代初めの頃の私(笑)。『(フィリップが死んで)独身になっちゃった。ああどうしよう』みたいな時期。(笑)一生懸命ジムに通って腕もここまで太くしたんだよ(笑)。HIV感染が判った時に病院のお医者さんに言われたの。一番エネルギーを蓄えるのに必要なのが筋肉なのね。それが無かったら早くイっちゃうって言うのよ(笑)だからある程度筋肉を付けてそれを維持して行く方がこの病気に対して絶対にいい、ってことで頑張ったの。

● Family

SUNNY: 沖縄の人間って本当に長生きするんだな、って思う。うちの父はね、79歳。ホワイ・プレインズからマンハッタンに未だに電車で毎日仕事に通っている。これって凄くない？うちの母は73歳。この間勤める会社を変えたら、仕事が無くなったみたい(笑)失業手当も6ヶ月貰ってそれも切れて、今は全然お金がないの(笑)かわいそうでしょ。だから暇してるわ。

二人とも用がない限り、呼ばなければ私のところへは来ないけどね。でもこの間も私のフィアンセのジムが旅行でいなかったから、まず母親にうちに一泊泊まりに来れば、ヘアカラーしてあげるから、って言ったのよ。お父さんも、皆で食事に行こうよ、それからうちに泊まって次の日ここから仕事に行けば楽でしょう？と言ってあげて。二人とも家に来たの。そんな感じ。

H: 素敵ですね、そういう家族って。

SUNNY: 楽しいよ。親が自分の側にいるっていうのは。ま、うちの親もかわいそうだけど。ま、仕方ないよね、二人の生んだ子供だから、私(笑)。

● I'm Coming Out!

SUNNY: パリからニューヨークに来た頃から、母親から電話かかってくる度にいつも『ガールフレンドはいるの？』って最後に聞かれたの。それがすごくイヤだった。(笑)そのうちに仕事の面で、段々自分にプライベートのお客さんがつき始めてこれなら自活出来るかも、という感じになって、会社を起こすことにしたんだけど、その前に母に言ったの、『もう、仕送りしなくていいよ』って。『ずっとこうしてもらっていたら、Sunnyも絶対自立できないから』って。そうしたらうちの両親、しっかり次の月から早速仕送りを止めたんだけどさ(笑)その時にね、『実を言うと、自分、男の子が好きみたい。だから自分はゲイだと思う。』って話をしたの。ま、親はこんな言い方しなくても分かっていたのかも、と思うけど。『ねえ、お母さん。この世の中の人皆、選択肢を与えられずに生まれて来ているわけでしょう？お母さんだって、沖縄に生まれたいと思っただけでいいなかったのに、沖縄に生まれてしまったのかもしれない。生まれる側に選択

する余地なんて無いでしょう?お父さんだってそうでしょ。で、Sunnyもそうなんだと思う。』って言ったの。『**自分も男の子として生まれて来たけど、男の子が好きなんだ。だからゲイだと思おう**』って。そうしたら沈黙があった(笑)

その時電話の向こうには両親がいたの。そうしたら最後に『**大丈夫よ。Sunnyは私達の子供だから愛してる。だから心配しないで**』って言ってくれた。うれしいよね。そんな事言ってくれるなんて。

その次に今度、HIVについてのアウトティング。HIVについてはね、もう、うちの両親達、大体知っていた。うちのお母さん、ニューヨークに来てから出来た友達がいるじゃない?で、『あの子はどうしているの?』って聞くから『死んだの。』って。『どうして死んだの?』って聞くから(笑)『**分かんないけど、多分エイズだと思おう**』って。ニューヨークで出来た友達の多くが死んでいったの。自分の中では長い間、『もしかして(自分もHIVポジティブ)?』ってという思いがあったの。そして自分の陽性が判明して両親にそのことをカムアウトした時、私の両親が心配した事は、私の健康状態や私がちゃんとした治療が受けられるのか、って事だった。あの頃ってまずあまり情報が無かったし。私が病気になった、ってことよりももしかしたら私が苦しんで死んで行くんじゃないか、って事が心配だったみたい。

H: 何だか信じられない位、いいご両親ですね。

SUNNY: うちってサポート凄くない?意外とね、進んでいるよね。

H: 日本人の親っぽくないですね!アメリカ人の親っぽい、何だか。

SUNNY: そうかもね。沖縄生まれの親だから(笑)。それ

でね、2年前には3度目のアウトティングをしたの。私はトランスジェンダーです、っていうアウトティング。上手く行った、全部。だからカミングアウトが3回あったの。ただ親に会うときはお化粧を薄くして、ハイヒールなんかも穿かないし。でも、私ホルモンを採っているでしょう?するとね、胸が自然に大きくなるのよね。だからブラジャーなんか胸がペッチャンコになるような形のものを着けて行っていたの。それまでだって私はちょっと変わっていたでしょ(笑)?だから別に特に何も思わなかったみたい。一回だけ、わざとスカート穿いてハイヒール穿いて行ったら、お母さんに言われた、『**あんた、寒くないの?**』って。(笑)あのね、トランスジェンダーはね、需要が大きくて供給が少ないの。だから何処に行っても引っ張りだこだったりするの。女の子になってからはすぐに相手が見つかるの。男の子の時はそんな簡単には見つからなかったのに。トランスジェンダーだったら、ブスでも大丈夫なの(笑)。

H: 例えばシリコンなどを入れたりりはしないんですか?

SUNNY: 何もしてないね。**一応ね、Aカップあります(笑)。**

H: あはは。

SUNNY: その時私の兄も一緒にレストランにいたのだけど、彼は凄くおもしろがっちゃって。一方お父さんの方は『あ、いい娘が出来た』って感じだったの。(笑)

H: **ところで、トイレは女性用、男性用どちらを使うんですか?(笑)**

SUNNY: 男の子の方に並ぶとね、皆に『**エクスキューズ・ミー**』って言われるわけ。(笑)『**あなた、並ぶ場所間違えますよ**』って。でもさ、例えば映画館のトイレに行くとするじゃない?そうすると、女の子の方はいつも混んでるの。でも男の子のトイレの方は回転が速いでしょ?だから男の子の

方に並ぶ。(笑)でもそうした途端、後ろから変な目で見られているのを感じるのよね。で、肩を叩かれて言われるの『エクス・キューズミー』って。『ここは男性用トイレの列ですよ』ってね(笑)だから答えるじゃない『はい、知ってます』って。でも意味が分かってないと思ったのか、しばらく経つと、また言われるの、『ここは男性専用の列なんですよ!』って。しつこいの(笑)。だから今度はニッコリ笑って。『知ってます。あなたと同じモノ、私も持ってます』って言ったの(笑)そしたら、その人、咄嗟には意味が分かんなかったみたいなんだけど、しばらくしたらピンと来たのか、おとなしくなった(笑)

H: ゲイの子供達が親に向かってアウティングすることについては、どう思いますか?

SUNNY: アウティングするとね、すごく楽よ。第一にね、気付いたのは**ストレスが無くなった**。アウティングする前、親とじっくりと話したい事は一杯あったのに、いつも自分の中にぼんやり隠しているものがあって、それが出来なかったの。だからそれが無くなってからは、まるで両親と友達みたいに話が出来るようになった。ほんの些細な事まで。すごく楽よ。アウティングは確かに大変だけど、これが出来るとバッチリ、人生明るくなる。友達が沢山いたとしても人間って、結局は家族からのサポートって必要になってくると思うから。それが無いと、苦しみを自分自身で抱えきれなくて結局自殺という道を選んでしまう、っていうケースだってあるからね。私も自分で抱え切れないくらい苦しんだから。こうやってニコニコ笑って言っているけど、(笑)私もやっぱり苦しんだ。すごく。自分の場合、もしアウティングが出来なかったら今でも苦しんでいると思う。その頃は親に会いたいけど会えない、色んな事を話したいけど話せない自分っていうのが凄く辛かった。嘘ついているようで。それと、親は死んで行く時、自分の子供がどういう人間だったか、本当のことを全て知っていた方が幸せだろう、って思ったの。それは中には知らなかった方

が良かった、って思う親もいるかもしれないけど。でもうちの親はね、知っていて良かった、って言っていた。どうしてかって言うと、親として『どうしてあの子は結婚しないのかしら?』という謎を自分の中にいつまでも残しながら死んで行かなきゃならないから、って。

さっきも話したけど、私の両親は私に何かあった時も、自分たちは側に居てやれない、その時誰かが私の側にいてくれるだろうか、心から心配して看病してくれる人がいるだろうか、ってことが心配だったみたい。ヘテロ・セクシャルの世界では反対の性、つまり夫であり妻でありが支え合ってその役割を果たす訳じゃない?私の両親は私とボーイフレンドの生活の仕方を見た時に、受け入れたの。同性同士のカップルかもしれないけど、カップルとして、ストレートの間人達と全く同じ事をやっているって。『この人は、ああ、Sunnyの事をここまで心配してくれている』ってことが分かったとき親は安心してくれたの。私が今の恋人と出会う前でシングルだったとき、**親が心配していたのは『もし自分たちが死んで行ったとき、誰があんたの面倒を見てくれるの?』ってことだったの**。もし誰かが私の側にいてくれたら彼等も安心出来るじゃない?その誰かが、どんなに自分の子供の事を心配してくれるのか分かってもらえたら。だから今回の私のフィアンセの事も勿論受け入れてくれている。だからそこが大事なのだと思う。自分たちがやってあげたいけど出来ない事ってあるでしょう?安心出来ると、お互いモヤモヤが減って(笑)。もっともっと密接な親子の愛情関係が持てると思うな。私が42、3歳だった頃って、ほら、ミッドライフ・クライシスっていう言葉があるじゃない?

H: 日本語だったら厄年かな。

SUNNY: そう、厄年。一番キツイやつだったけど。でもね、厄って抜けたときに、自分で分かるの。

H: へえ～。

SUNNY: そう。分かるの、抜けたってことが。そして今度は外の世界に向けてのアウティングが始まったの。HIV に関しても友達とか周りの人だけじゃなく。。80代にファッションをやっていたせいで、私の事を意外と知っている人もいるの。で、雑誌社の人もアプローチしてくるのね。『MORISANEさん、HIVの事について書きたいのだけど、書かせてもらえるかな?』ってこともずっとあったのだけど、断っていたの。自分はまだその準備が出来てない、ってことで。だけど去年初めてアウティングをしたの、インタビューを受けて、新聞にも載って。そういった形でのアウティング。今までは自分自身の問題と考えていたものが、だんだんと隠す事でもないって思えて来たんだと思う。HIVに感染したとしても、それでも自分は自分って感じ。今までとても控えめだったのに、『自分はHIV持ってる、でもまだ生きてるの、凄いでしょ!』みたいな開き直り(笑)それだけじゃないの、ガンもやったし(笑)みて、写真も撮ったからさ。見ての通り今は女の子じゃん!って(笑)ハハハ。

そんな風に、アウティングをしていく中、特に心配したのはさっきも話したけど私が80年代から通っていた仏教。お寺で私のことを知っている人達は皆、私の事を男の子として覚えているわけですよ。色々な止むを得ない理由で5、6年修行を止めていたのだけど、その時に私にどんなことが起きているのか何も知らせていなかったの。私にとってお寺の人々に対するこのアウティングの意味は大きかった。ゲイのコミュニティ内でのアウティングは比較的簡単だけど、それ以外の環境では未だに難しかったりするものでしょ?

日本の読売新聞に私の記事が発表されているから、それを読んだ人達や、もしくは切り抜いて、後で噂をしてくれた人々もいるだろうし(笑)そう言った事を経て、ちょっとこ

れでクッションがついたかな、そろそろ自分が表に出てもいいんじゃないかな、って思ったの。それでこの間やっと初めて、サンフランシスコで自分の仏教の為の修行があったんだけど、アウティングして参加して。皆、『あなたどこかで見た事あるけど、城間さん?』って。『お綺麗なられて』みたいな事言われて(笑)私も『ありがとうございます』なんてね。なんて言ったら良いのか分からないからね(笑)。

修行のとき、床に座っているでしょ、自分の名前を書いた札があるのよね。昔からの人達は私の事を知っているから、名札を見て『えっMORISANEさん?』ってこっちを見たら女の子がいるから(笑)『ええ?え?』って何度も確認してもわたしがいるわけよ。(笑)

こんな風にアウティングをする事で自分がすごく明るくなったのね。彼からもプロポーズまでされたし(笑)確かにアウティングはね、殻を破った直後は辛い時期があると思う。で、その時期を超えたとき、こう、ポコッと頭が水面に出たような感覚があるの。仏教の話になるけど、この苦しい坂を越えたところに村があり、温かいご飯が待っていますよ、って。だから、疲れていても、周りが暗くなっても、一步一步頑張ってそこに辿り着いて下さいって。本当にそんな感じだったの。その話を信じて頑張ってみた時に、分かったのだけど、そのお話は本当だった。

H: アウティングする中でどういった点が一番辛かったんですか?

SUNNY: 親に辛い思いをさせたくないって思い、それが一番辛かった。

H: それは親の期待を裏切る、というような感覚ですか?

SUNNY: そうじゃなくて、私がいわゆる一般の人と違うってことで、親は色々な見えない部分で多分苦労するだろうな、って思ったから。そういう苦労を親に味わってもらいたくなかったし。だからアウトティングっていうのはある意味、他の人にとって自分勝手な行動に成り得るのよ。でも結果的にはそうならなかった。今の自分の親を見て、『あ、やっぱりやって良かった』って思うよ。私について何も知らないまま死んで行くよりも。

H: アウトティングが親に苦労をかける可能性がある、と分かっていたにもかかわらずSUNNYさんが自分の親にアウトティングした理由はなんだったんですか?アウトティングをすることでご両親とより深い絆を持つようとしていたんでしょうか?

SUNNY: そうだね、私は3回アウトティングしているでしょう。若い頃、まだ親に自分がゲイである事を告げられなかった時、自分が辛かったの。母親との電話の最後に、いつも『彼女はいるの?』って聞かれる。それが嫌だったから、電話を掛けたいのにかけられない。だって、掛けても最後に聞かれる事はどんなことか知っているから、電話掛けたくなかったの。**お母さんに色々な事を色々話したい、報告したいのに、それが出来ない。だから苦しかった。もっと両親に自分の事を知ってもらいたい、私も彼等を身近に感じたい、色々な事を話したい、自分を隠したくない、もっと自由に生きたい、そういう気持ちだった。**多分それだけだと思う。それと、私の場合、両親が揃っていたでしょう?彼等もお互いに相談することが出来る相手、話し合う相手がいたわけよ。これもアウトティングに関しては大事な要素だと思うのね。一人で抱え込まずに済んだからこそ、私の両親も乗り越えられたんじゃないか、って気がする。もしシングル・マザー、シングル・ファーザーの場合でも、親しい友達、色々相談出来る相手がいれば、大丈夫だと思うの。一人で抱

えるにはやっぱり難しいものがあるよね、『他の身内にはなんて言おう』とかっていう悩みがあるからさ。

H: 例えば、自分がゲイである事には問題が無くても親がそれを受け入れられないようなケースもあると思うんですよ。特に日本人の親って自分の子供がゲイである事を受け入れる準備がいまいち出来ていない、とでもいうか。友達に聞いたんですが、ある韓国から来た男の子が、クラスに向かって、自分が何故韓国からアメリカに来たか、その理由を説明したらしいんです。彼はゲイで、その事を知った親が彼の事を医者連れて行き、その医者は彼を『ストレートに戻す為』電気ショックを与えたそうです。

SUNNY: ええ~!?それはひどいね。

H: 日本の場合、そこまで極端でなくても子供のせくシャリティーを素直に受け入れられる親って、まだ少ないような気がするんですよ。どちらかっていうと『私達の育て方が悪かったから子供がゲイになったんだ』っていう捉え方。それについてはどう思いますか?

SUNNY: そういう心配も、元をたどれば親の愛情から来ているんだと思うよ。子供がどういう形で生まれ、どう育つにせよ、自分の体の中から出て来た存在である以上、子供の在り方や行動には自分にも責任があるって感覚があると思う。私もそれには一理あると思うんだ。自分は両親の血を継いでいる訳だから。確かに行動そのものは、本人の判断だったりすると思うけど。

● Thoughts on Suicide

H: 自殺を考えた事がありますか?

SUNNY: 今は無いわよ。でも、自分の体が女の子になる、トランスジェンダーになるって分かったのが5年位前なの。で、HIVの為のお薬を飲みながらHIV感染者専門・トラン

スジェンダー専門の先生の指導で、ホルモン・セラピーが始まったのね。ホルモン・セラピーが始まると体型が女性らしく丸みを帯びてくる、と聞いていたし、私も結構期待していた。ところがそのセラピーが始まる少し前に、HIVの為のクスリが変わったの。それを服用すると、体の脂肪が移動を始めるんだけど、その時にホルモンをとり始めたから、脂肪の動きによって体型が変わってしまったの。このクスリ特有の副作用のせいで、手足、お尻、胸、そういった脂肪が全部、降りて来ちゃったの。

H: ...

SUNNY: 私も上手に隠してるんだけど、体に脂肪が無いの。自分でもきれいになりたい、と思ってやったのに!おっぱいだって丸くなるはずだし、脚も脂肪が移動しちゃったから血管が浮き出して、まるで60、70のおばあさんの脚みたいになっちゃったの。よく年配の人が短いパンツを穿いているとき、血管が浮き出てる時とかあるじゃない?筋肉はあるけど、脂肪が無い脚。あんな感じ。

H: それはかなりのショックでしょうね。

SUNNY: そのショックに打ちのめされてる時期に『あなた**は**ガンです』って言われたの。最低でしょ、もう。(笑)

● About Cancer

H: ええ!?

SUNNY: ちょっとした理由で検査に行ったらその3日後、ドクターから電話が掛かって来て、検査結果がガンだった、って電話で言われたの。

H: 体のどの部分に?

SUNNY: 直腸。それってね。HIV患者には凄く多い事らしいのね。それこそ、二人に一人っていう割合で。私知らなかったんだけど。だから患者がHIVに感染してクスリを取っていた場合、お医者さんは患者ががンを発症していないか、必ずチェックする事になっていたみたい。で、すぐに手術して。

H: どういう風に手術するんですか(笑)。。?やっぱりお尻から?

SUNNY: やっぱお尻から..っていうか、実は私にも何が起きたか分らないんだ(笑)。『はい、1、2、3数えてね』って言われたの。そして4、5までは覚えているんだけど、そのとき、親指か小指かが痛かったのよ。『痛いなあ〜』って思ったのね。それは手術中に私の脈を測る為の機械がテープで付けられていたせいみたいな。それで目が覚めたらこうやってうつぶせになっていたのね。『起きて下さい、終わりました』って。

とにかく私も手術なんて初めてだったし、怖かったし、そういうのが大嫌いな(笑)。だから整形もしたいななんて、夢もあったのだけど(笑)手術そのものが怖いわけ。でもガンを告知があって、その3日後にはすぐに手術。病気が病気だから広がる前に、ってことで。手術は気付いたら終わっていて何も覚えていなかったから、『あら、手術って簡単じゃない!』って思って(笑)3つ数えたと思って次に起こされたと思ったら『終わりました』だからさ。だから『これだったら整形も出来るな』って思ったの。前向きでしょう、私って(笑)

H: (笑)ついでに聞いておこう、Sunnyさん、整形は?

SUNNY: まだしてません、整形は。これからするわ。今はお金がないの(笑)アハハ。

H: (笑)手術後、排便をする時はやっぱり大変なの？

SUNNY: それは大変だった(笑)。やっぱり痛みがあるから。おなかの下の方も痛かったし。でもお風呂に入ると良いといわれて入ってみたら、楽になったんだけど。まずHIVに感染したこと。自分が次に女性になって、脂肪があったのにHIVの薬の投与のせいでそれが無くなって体つきが変わってしまった事、それに今度はがんの治療が始まったら、自分が一体、やって行けるか行けないか。自分でも分らなかった。誰かが私に言ってくれたのだけど、病気という言葉の『病』はウイルスの意味だとしても『氣』、これは気の持ちようの事だから、自分でなんとか出来るはずだって。気持ちさえちゃんとすれば、乗り越えられない事は無いよって。でも、そのとき自分の中の気の部分が。いつもの半分のエネルギーも残ってなくて、苦しくてたまらなかった。その時はまだ、自分がトランスジェンダーになった事を親にも伝えていなかったし。彼等の方だって、生きて行く上で色々悩みを抱えているのに、こんな事を話して面倒をかけたく無い、って思った時**(自殺が)正直頭を横切った**。でもその時に、自分の事をしっかりしてるな、って思ったんだけど(笑)次にお医者さんにあった時、そのとき自分の抱えていた事、彼に向かって全部吐き出したの。よっぽど苦しかったのだと思う。意外と普段はね、自分の中身を人には見せないんだよ。でもね、ドクターの顔を見たらさ、もう泣き出しちゃって(笑)そしたらお医者さんがすぐに、抗鬱剤を処方してくれて、それを摂るようになったの。そしてその薬を取ったその日からいきなり気分が良くなって(笑)前向きな気持ちになれたわけ。そう言った抗鬱剤をとっているHIV患者って一杯いるんだけど。皆が言うのよ、『Sunny、あれはある程度の期間飲んでから効果が出るものなのよ。一日飲んで次の日から具合が良くなるなんて事無いのよ!』って。だから私は『あ、そうなの』ってね。(笑)

で、その抗鬱剤も今年になってから全然飲んでいなくっ

て。自分のそういうのが無くっても平気で。やっぱりね、その時も家族のサポートの大事さとか、凄く感じた。あの時自分の気力が本来の半分も無かった時に、その足りない部分を埋めてくれたと思う。凄く助かったよ。

H: ニューヨーク、パリ、東京。Sunnyさんが住んだことのある街の中でどこが一番好きですか？

SUNNY: そうだね、私はここに25年住んでいるから、やっぱりニューヨークが好き。私はニューヨーク以外のアメリカの都市は駄目。サンフランシスコには自分の昔の彼氏がいたからしょっちゅう行ってたけど。最初はいいなと思ったけど、街自体が小さすぎて自分と合わなかった。気候は素敵なんだけどね。

H: ニューヨークのどんなところが好きなんですか？

SUNNY: それはね、ニューヨークが24時間起きている街だから。(笑)そこが好き。楽しいし、便利でしょ。ヒロシ君は？

H: 自分は、済んだことがあるのって東京とニューヨークだけなんだけど。東京って情報が多すぎて、圧倒される。ニューヨークも情報は多いけど、余計な情報に振り回されないで済む。何よりほっといてくれる。自分のペースが自分で決められる。そこが好きかな。

SUNNY: あ〜、分る分る。

H: それでニューヨークは、他の街よりもストレス・レベルも高く、余りに様々な文化が混じりあうこと無く存在していますよね、その隙間に自分が立ったとき、孤独を感じやすいと街だと思う。寂しさからノイローゼになってしまう人も多いですよ。

SUNNY: そうだね。その頃私も仕事はしていなかったし、

ただ自分の体のケアをしてれば良いだけだったのだけど。自分が落ち込んでいるのを他の人に見せるのが嫌なタイプだから、お家に帰って来て一人きりになった時はやっぱり、落ち込んだよ。周りの皆それぞれ問題を抱えているのに、自分の問題で周りの人に余計な迷惑や苦勞を掛けたくないって気持ち。で、悩んでみたところでどうすることも出来ない。だから**そういう時は自分の中で戦うの、自分の中の問題がクリアになるまで**。もちろん簡単にはクリアにはならないけど(笑)最終的にはね、**何も考えずに寝るのが一番(笑)**

H: そういうスランプを乗り越えるきっかけになったのは?

SUNNY: 健康かな。やっぱり元気になってから悩まなくなった。

H: それは肉体が元気になったという意味ですか?それともメンタルな意味ですか?

SUNNY: 体の方。やっぱり体が元気じゃないと、気持ちも落ちる。不安になるのよ。やっぱり明日のことがわからないから。

H: 若い頃に比べると自分が精神的に変わった部分とかありますか?

SUNNY: やっぱり成長したよね。この経験全てを通じて。特に死の経験。死の経験というか、死を見た時の経験っていうかな。あの頃確か26、7だったけど、毎年自分の知り合いが何人も死んで行ったのを見ていたから。

● ABOUT LIFE

H: Sunnyさんの中で死ぬことと、生きることの違いってな

んですか?もし、自分が同じ質問を受けたら僕だったら。この世の中ってというのは与えられた肉体と条件を使って能力を発揮する場だと思っんですよ。どれだけ自分という人間の持つポテンシャルを発揮出来るか。だからまだ自分にはその違いがわからない。これは多分、僕が若いせいもあると思う。自分にとっては死が全然先にあるから、自分の死が想像出来ない。Sunnyさんの場合、仏教の影響やお友達を沢山亡くしている。またガンやHIVの感染という体験もしている。多分他の人とは違う死生観を持っている気がするのね。Sunnyさんにとって生きていることと死ぬことって何が違うんだろう?

SUNNY: それは難しい質問だな。一つだけ言えるのは、**何があっても絶対に生きていた方が良くてこと**。素晴らしいことだよ、生きるって。思う存分この肉体を使って生きるってこと。**私、自分の人生にね、後悔することがなんにも無いの**。今もHIVに感染しているということも関係しているかもしれないけど、毎日毎日ね、いつ死んでも良いように、後悔が無いように人生を送りたい、って思っているから。死んだ時にあれやっておけば良かった、って思いたくないじゃない?死ぬ前に『ああ〜もっとセックス一杯しておけば良かった!』とか『ああ〜整形しておけば良かった!』とか思いたくないの。(笑)

H: ご自分のことが大好きなんですね。

SUNNY: 嫌いではないよ。

H: え、その程度なんだ(笑)自分自身のこと嫌いな人間って、自己嫌悪を引きずりたくて引きずっている人のような気がするんですよ。ほら『私って暗いから。』とか言う人って実は、『自分が暗い』という『思い込み』を自分が引きずりたくて引きずっているだけだったりするでしょ?

SUNNY: わかるわかる。

H: でもSunnyさんってそういうカンジしないから。

SUNNY: それはね、私が全部受け入れているからだと思う(笑)。だから何が起きても大丈夫。余裕(笑)。

H: それにSunnyさん、もう全て経験したいことは全て経験しているし、やりたいことは全てやってしまったからでしょ(笑)

SUNNY: (笑)ただ困っているのはこれから自分の人生をどう過ごそうかってこと。仕事のできるうちに自分に何が出来るだろう。でもそれが何なのかはまだ見つかってないの。面白いでしょ、この歳になって高校卒業した学生達がこれからの進路を考える、そんな気持ちを味わっているのね。

H: 随分贅沢な悩みですね(笑)。

Sunny & Hiroshiの公開書簡

From Hiroshi:

この間はインタビューの為にわざわざ時間を割いて下さって有り難うございました。Sunnyさんに言うておこうと思ったことがあって、メールしました。

インタビューの最中、Sunnyさんにとって『死ぬことと生きることを隔てるもの』ってなんだろう?って尋ねたのを覚えてますか?あの時のSunnyさんの答えを聞いた時、嬉しかったし、ほっとしたんですよ。

何故なら、この世の中の多くの人が、死んでしまったら全

てが終わってしまう、と考えるでしょう?この間電話で話した時に、『私はまだ、死に対する準備が出来てない』ってSunnyさんが言った時、その言葉の真意がよく解らなかつたんですよ。

でも今回、Sunnyさんから聞いたのは自分の持つ精神性と死との関わりについてだった。Sunnyさんがどれだけスピリチュアルな存在であるかってあるかってことに今更ながら驚いたんですよ。

人生って川の流れのようなもの。この流れの中で、人って自分のなりたい物になら何にでもなることができるんですね。人生って美しい!

ヒロシ

From Sunny:

ヒロシくんへ

そう、ヒロシくんが言ったみたいに、人生って河の流れのようなものなの。そして川の流れは私達に人生の在り方を教えてくれるのよ。

私ね、カヌーに乗ったことがあるの。初めての川下りの経験だったんだけど、そこから私が学んだのは自然の力に逆らうと、川下りってとっても難しいものになるの。でもね、自分の人間としての心を捨ててコントロールの全てを『自然』に委ね、自分はそこに自然と共存、川の流れと共存するの。するとカヌーを漕ぐのがグンと楽になった。人生も逆らうことをせずにそんな風に送りたいよね。

仏様の最後の説法によればNirvanaとは全ての川が出会う海なのだ、って言う内容なの。

ヒロシ君の言う通り、この世界に漂いながら、私達は自分

達のなりたい存在になることができるでしょう。私は物事の流れ、自然とともに在りたいと思っている。そうすれば素晴らしい、そして美しい人生が送れるはずだから。

人生をもっともっと美しくすることだってできるわよ。そんな場所にヒロシ君は既に居るんだよ。

Sunny

Hiroshi-san,

Yes, like you say, river is like life and river teaches a way of life.

When I had a chance to ride a canoe. It was my first experience on the river going down. What I learned from it was that when I was against the nature, I was facing most difficult ride but once I, human mind, gave up and gave a control to the nature or be one with nature, be one with river, my ride was so easy. I would like to ride my life easy as so and never against it.

Buddha left the last teaching, the Nirvana, is the ocean like all rivers meet.

Like you said you can flow in this world and you can be anything you want to be. I believe that and I will always try to be one with nature. I know then, I will have a wonderful and beautiful life.

We can make even more beautiful! I know you are there already.

Life is beautiful like you!

Sunny

